

神戸大学創立110周年記念事業シンポジウム 2012/09/07

「学習成果を重視した評価への対応」

「神戸大学コンソーシアムひょうご神戸 第7回FD・SDセミナー」

学修時間と学習成果 —評価とIRの視点から—

九州大学 基幹教育院

小湊卓夫

なぜ学修時間と学習成果か

- H24年3月「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）」
- 学修時間の増加を代理（間接）指標として、大学が目標とする学習成果を生み出す環境整備や方法等の開発を提案

学修時間の確保と学習成果

- 授業時間以外に、事前・事後の学習、能動的学習、キャンパス外での学び（インターンシップ、サービ斯拉ーニング）を通じた学修時間の確保が求められている。そのために
 - 教育目標の明確化
 - カリキュラムの体系性確保
 - 学修支援環境の充実
 - 高大接続の円滑化
 - 教学マネジメントの確立

が求められているが・・・

大学での学びに何が影響しているのか？

- 大学生生活の充実 (student success) には何が影響しているのか？
- これまでは、良い教員と良い学生を確保すれば、良い成果が出ると思っていたか
- インプットとアウトプットの重視から、プロセス (学習環境) あるいは学生経験 (student experience) も重視へ
- 果たして我々は、大学生生活が充実するための要因を把握しているのか？

大学での学びに影響を与える要因

- 高校の成績、高校での体験、入試成績、性別、住居（自宅、下宿）、学習準備状況
- 教育方針、初年次オリエンテーション、早期の指導
- 出席状況、履修状況、学修時間、学修支援プログラムへの参加状況、多様性、クラスの規模、教員の学生に対する姿勢
- 科目の順次性（配当年次）、カリキュラムの体系性
様々な要素が複雑に絡んでいる = 総合的な在学生管理が必要（我々は学生に関し何を知っていて何を知らないのだろうか、そのこと自体が不明かもしれない）

図 1.1

学生の在籍継続に影響を及ぼす様々な要因



評価及びIRからの支援

□ 入口の課題

- 積極的な学生を全ての大学が採用できるのか？ どのような学生を受け入れ、何を教育したいのか？（アドミッションポリシーの再検討が必要）
- センター試験や個別一般入試で、大学入学後、継続して学習できるあるいは自大学にfitする学生を選抜出来ているのか
- 出来ていなければ、入試形態のみならず科目配置やクラス配置をどのように行うのか

評価及びIRからの支援

□ 入学後の課題

- 論理的には学修に与えるカリキュラムの影響の体系的な検証が必要だが、困難
- 履修科目の影響を検証することから始める：入門科目や履修条件となる科目の影響の検証→1, 2年生が専門に順調に進めているかの手がかりを探る
- 同一科目における成績分布の検証→教員の成績付与の妥当性を扱うため、慎重な取り扱いが求められる
- カリキュラムが想定する科目の順次性と、学生の実際の科目選択との比較 (behavioral curriculum: 学生特有の習性)

評価及びIRからの支援

□ 卒業後の追跡

- 卒業生は卒業後どのようなキャリアを歩んでいるのか：居住地、就労形態、職域、給与、転職経験
- 卒業後、継続して教育を受けているのか、その目的は何か
- 自身の受けてきた大学教育に対しどのように考えているのか
- 雇用者から卒業生の能力等に関するフィードバックを得ているか

教育の内部質保証システム構築に向けた支援

- 大学の掲げる教育目標に沿った教育成果をどのようにあげていくのかは、在学生のみならず入学前、卒業後との比較ならびに学生の成長の在り方を検討することがベースとなる
- そのためには学内の各種関連部門と評価やIRの担当部門や人材との連携が必要
- 教育内容や方法に関しては教員、学部学科を巻き込んだ意見交換が求められる←カリキュラムや学生に関する調査結果や定量的データを提示し議論の基盤を共有する
- 多様な領域や関係者とのネットワークとコーディネーション能力を持った評価人材、IR人材が強く求められる